銀河の里
あまのがわ通信
2007年・2月号 55

編集　社会福祉法人 悠和会
銀河の里 広報委員会
代表　牛坂 友美
発行　銀河の里
〒025-0013
岩手県花巻市幸田4-116-1
TEL(0198)32-1788
FAX(0198)32-1757
E-mail:yuyu@mx51.ettiline.jp

管理と関係　－ほのぼのした空気を大事にしたい－

板垣　由紀子

昨年の暮れ、ノロがはやった。人間関係にマニュアルは害悪と、これまでマニュアルを持たずにやってきたグループホームに、徹底したノロ撃退マニュアルが導入された。下痢や、嘔吐に殺菌。とにかく疑わしきは即対応した。緊急事態に一致団結。汚れはさっと片づいた。（はじめは、どこか違和感を感じていた）作業に追われ、帰りが遅くなることもしばしばだったが、文句を言う人はなく、逆に現場は活気づいていた感じさえあった。

しかしがんばりすぎた殺菌で私は喉をやられ、ホーム内にはとにかくダメダメの雰囲気が出て、これまでの鷹揚な空気が一変した感じだった。

一件落着で、晴れて新年を迎えたのだが、どこか空気が変わったままもどらない。管理マニュアルの徹底はノロには良かったのだが、暮らしには冷たさが残ってしまった。

そんな折りＹさんが退院してきた。元旦に腎盂炎で入院し、一週間不在だったＹさんが帰ってきて、いつもの席で、いつものように過ごしているＹさんに、懐かしい暖かいものを感じて、ほっとしている自分がいた。その暖かさは、以前の管理ではない生活感を、彼女から感じたからだと思う。

それでもマニュアル管理の影響は、彼女が戻ってきてくれても払拭はできないでいた。風邪をひいたり、熱がでて休む人がでると、どこからともなくジワァ～と広がる不安。それは、**大変だ、大変だ、困った困った、“どうするの、どうするの”**と迫ってきた。不安の渦は、チームには降りてこず、一人一人を直撃する。そして、それぞれが何とかしなくちゃと張り切りだし対応に精を出す。皆、一生懸命なのだが、何をやっているのかお互いに見えなくなりずれていく感じであった。

そんなずれの感じを一人のスタッフに言葉で伝えた。“私たち、なんか不安にやられていない？”話は瞬時につながった。人生って“不安”だらけだ。だって答えがないのだから。不安をマニュアルで片づけようとしたら、それは単なる管理になる。そして簡単に人は人を支配してしまう。マニュアルは解りやすいし簡単で機能的で効率は良くて楽だけど、怖いのは、気がつかないうちに不安にやられて、必死で管理をしているうちに、支配になっているということだ。冷たい空気や違和感はそうしたところからきたのだと話し合った。

不安は、なくせばいいのではない。不安は、明確ではない問題点なのだから、抱えたり、向き合ったりしていると形を表してくる。そこにどんな意味が隠されているのか、もしくは解決すべきことがあるのか、私たちはそれを自分との関係において考えるべきなのだと思う。

不安を“どうするの、どうするの”とあおるだけでは、何も見えてこないし、ずれがずれを生み、渦を巻いて一人一人が飲み込まれる。飲み込まれないためには、チームで話し合うことが大事と思う。それぞれの性格、感情、感覚、思考、直感といったあらゆるものを総動員して言葉にしていくことは重要なことだ。

マニュアルを否定するわけではない。マニュアルが必要な時は確かにあり、それは大きな効力を発揮するだろう。けれども、対人関係を重要とするこの現場にそれを入れる時には、その管理からくる支配性についても私たちは十分に意識する必要があるのだと、このノロ対策を通じて経験できた。

編集後記

2月4日、「悠和の杜」オープン。店内には、ＤＳとＧＨで作ったみづき団子が飾られた（みづき写真：今月号２ページ目）。今年も団子の色は自然の食材を使った。人参やヨモギ、紫芋、梅酢・・・一つ一つの色にも味わいがあるが、いざ、みづきの木に飾られたその彩り鮮やかなこと。それぞれの団子に、自然の恵み、四季、里に関わる人たちや共に過ごした時間といったものを感じずにはいられない。新たな「悠和の杜」という舞台ができ、それぞれにエピソードに事欠かない毎日。感性豊かに、それぞれの情熱や想いを乗せて、里の暮らしをこの銀河列車で伝えて行けたらと思う。（戸來）

どんと焼き　－炎の音に心奪われ－

恒例のどんと焼きが１月１６日に行われた。グループホーム、デイサービス、ワークステージ合同で総勢約５０名。寒い中ではあったが外に用意された椅子は満席となり、くみ上げられた薪に火が入れられた。スタッフのにわか神主ではあったが、結構いけてる。手作りの幣束を手に「祓いたまえ、清めたまえ～」。とたんにザワザワ感が静まり、頭を垂れ、手を合わせるみんな。

拝んだ後、正月のお飾りを手に薪の火にむかう。「そ～れ」と投げ入れようとするがなかなか手放したくなく、いつまでもつかんでいたい人、思いっきり少し離れた所からポーンと投げ入れる人、しっかりまずお飾りに一礼し、体の向きを火の方に変え胸の高さに両手で持ち上げ一礼をした上で静かに入れる人と各々のやり方で火に向かった。

各々の思いを受け炎が燃え上がる。火の周りに集まった人はもちろん、渡り廊下や、離れたグループの和室からと、みんなどんと焼きの火に吸い込まれるかのように手を合わせる。現実を越えた“神への思い”を感ぜずにはいられなかった。パチパチと燃え上がる炎の音に心を奪われ、神聖な時を共有する時間となった。

『どんと祭』は、しめ縄やお札、お守りを、勢いよく燃える炎で燃やして、正月に家に訪れていた「歳神様」を神の国へ送りかえす行事だということだ。だから、おのずと手を合わせたくなるんだなと思った。

どんと祭の火で思い出したのは「火は自然の怖さ、楽しさ、多くのことを教えてくれる。敵から逃れ、暖をとり、調理をして火を囲むことは、祖先にとって長い間大事な時間だった。そもそも火を手に入れてヒトは人間になった」という“火の文化”についての記事だった。物理的にも、象徴的にも火は人間にとって重要なことなのだ。改めて火に思いを馳せたどんと祭だった。

（西川）

新たなステージに立って

悠和の杜が２月４日いよいよ開店した。店を持つことは私たちの夢だったが、こんなにも急に店がオープンできることになろうとは思いもしなかった。障害者自立支援法が施行されてから、利用者は自己負担額が増し、工賃の手取りが大幅ダウンし、とてつもない危機感に襲われた。販売班は行商を続け、餃子の通信販売、時にはイベントのテキ屋にも挑戦しながら、弁当屋、そば屋はどうかと自立支援法に立ち向かうべき企画を模索しつづけ、辿り着いたのが「食彩空間　悠和の杜」である。

店がオープンする直前に第一号のお客様として、ﾜｰｸｽﾃｰｼﾞで働く利用者を招待した。道中「私たちのお店だよ」と伝えながら行ったが、店の前でみんなは、立ちすくみ呆然となった。緊張した面持ちで店の中に入り、たくさんの創作料理を食した。シーザーサラダに使われてる野菜は、ハウス班のみんなが育てたものだ。細かい種を蒔くところから、毎日の手入れまで全て利用者が担っている。ガーリックピラフに使用されているお米は、2006年腰痛と疲労に耐え、汗水流しながら収穫した銀河米だ。揚げ肉まん、鉄板餃子は餃子レンジャーが一つ一つ丁寧に手作りした力作。すべての商品に利用者みんなの苦労と愛情が詰まっている。その食材に料理長がプロの腕をふるい、魂を込めて創作料理に仕上げた。利用者達の表情が、驚きから自信に変わっていくのを感じた。

センターキッチンを担う餃子レンジャー達には、今までの生産・製造工程から新たな課題が見つかっている。質の良い商品を作るために、職人としての修行が続けられていくだろう。彼らが自らの技を磨き、このステージでその役割をどのように演じるのか、しっかり支援し、じっくり見守っていきたい。私もその舞台を構成する一人として。

就労支援員：米澤里美

歩み２

先日、グループホームの利用者Ａさんの散歩に久々に付き添い、一緒に歩いた。Ａさんと一緒に歩いたのは、一年振りくらいになる。以前は、一定の距離を保ちながら、その方の実際の歩みを見ながら、その方の人生の歩み、そして自分の人生の歩みにまで、思いを馳せたのが思い出された。

今回は、雪道ということもあり、横にぴったりとつき、寄り添うようにして歩いた。同じ道を何回か往復しているうちに、ある場所だけ足跡が、大幅に曲がっていることに気付いた。そんなはずはないと、今度こそは、まっすぐ歩こうと、意識して歩いてみるが、自分ではまっすぐ歩いているつもりでも気がつくとその場所では大幅に自分の歩みが曲がってしまう。たぶん、一人で歩いていれば、こんな風には曲がらなかった歩みの軌跡。これは、Ａさんとしか歩む事の出来ない軌跡だとそのとき感じた。

利用者の方と向き合い、本気で共に生きようとすると、自分自身がすごく揺らぐ事がある。これまで自分が感じたことのない感情に向き合わなければなかったりする。しかも、その感情は、だいたいが、怒り、失望・驕りといった、隠したり、見ないようにしてきた自分自身の奥にある闇のようなところから出てくる。その上で「お前はどうする」と問われるのである。マニュアルなどを作って“この人には、こう接しましょう”などという画一的な接し方が役にたつような世界ではない。グループホームにはそういう深みがある。

非番の夜、ある方が眠れないで騒いでいるという電話が入った。駆けつけて、その方の部屋で何時間か過ごした。話をしながら、その方も落ち着いてきて、今にも眠りそうになり、時間も時間だからと私も帰ろうとしたとき、その方が「もう帰るのか？」と言った。「明日もあるし、俺も眠らないと・・・」と言うと、「覚悟してきたんじゃないのか」と、ぼそり。「お前の覚悟じゃまだまだ甘い」と、突きつけられたような気がした。

自分自身をかけて接しているかどうかが問われることが度々ある。ここをはずすと、その人とは一生出会えないかもしれないような「勝負」がそこにあると感じる。

何故、そんな厳しい道を歩んで行かねばならないのか？と以前の自分なら疑問を持ったかも知れない。しかし、人と接する仕事、ましてや援助という要素の入った仕事は、それが基本で、その構えが無いならやってはいけないのだと思うようになった。私との関係の中にその人の人生そのものが存在してくるからだ。支援とか、援助と簡単に言うが実はそういう厳しいことなのだと思い知らされている。

今を生きる、あなたと私の間に広がる風景がある。それは私の人生そのものであり、相手の方にとってもそこに人生がある。頭で考えて自分としてはこうやりたいとか、こうなりたいとか思うことはあったとしても、それを超えて事は起こる。考える事は確かに大切だが、思った事を超えて人生は紡がれる。それは自分の進みたい方向と逆かもしれない。回り道かもしれない。しかし人生は大いなる何かと繋がりながら、出会いによって紡がれる。

自分が頭で考えただけでは描く事の出来ない軌跡がある。これから私はどんな軌跡を誰と描くのだろうか、来たることに身をゆだねる勇気と、畏敬をもって進んでいきたい。

（及川）

大根を　どんどん洗う　大タライ　洗って流し、貯めては流し

Ｍさんが「大きい気持ち持ってないといけないよ。めめっちいよ。タライのようなおっきい気持ち持って。」と言った。その言葉を聞き、気持ちを大きく持つ、そのたとえがタライとはわかりやすいと思ったし、大きいタライを持つことで相手と話していてさまざまな感情が出てもその大きいタライがあることでその人のことばと感情をして自分の感情もタライで受け止め感じながらいられるのではないかと思えた。小さいタライだと自分の感情だけでいっぱいになるような気がする。大きくて広いタライをもちながら人と関わり、その人との関わりで感じたこと（水）を自分のタライにためていきたい。水がこぼれる？いや、こぼれないくらいおおきいタライを私自身持って行きたい。
「大根何本でも洗うまって言うようでないと」とも言うＭさん。そうか洗う？流す役割もタライはするな。ともかく、なんでもこい！ドンとこい！と言う気持ちかな。

（美貴子）

苦しみも　出たとこ勝負で　受けていく　折れば飛び立つ　羽ばたく空へ

ショートステイ中のＹさんが、テーブルの上にあった広告で折り紙を始めた。何ができるのだろうと見ていたら飛行機ができた。私も一緒に折ってみた。「Ｙさんの見ながら折ってみまう」と私が言うと「わからねえな」。途中までは同じ折り方で、後は首をかしげながらお互いの折り方で紙飛行機を完成させた。それぞれ形が違っていた。Ｙさんは３つ折ったが３つとも違う形。

生きている中で分からないことが多いけど、おる（折ると居る）ことで、この紙飛行機のように色んな形になっていくのかなと思った。わからなくても自分の中で何か（思い）を折れば形になる。いろんな形の自分の紙飛行機を折って飛ばしたらいい。

（美貴子）